



Washington Japanese Language School 2023年2月25日 発行 第37号

ワシントン日本語学校

はなみずき

mail:wjls@wjls.org <http://www.wjls.org/>



ワシントン日本語学校
校長 神戸 昭夫

[ワシントン日本語学校事務局]
HOT LINE (301)962-7415
TEL (301)962-7410
FAX (301)962-7411

第21回 東和エッセイコンテストの賞状が届きました！

1月14日、第21回東和エッセイコンテスト（フィラデルフィア日本人会主催）の授賞式がオンラインで行われました。このコンテストには例年本校からも多数の生徒が応募し、そして受賞しています。

今回のテーマは、「難民の子どもたち」（中学生部門）と「国境を越えてー21世紀を考える」（高校生部門）でした。「エッセイには必ず自らの経験・体験より得られた知識や独自の考えを具体的に表現する」が条件になっています。

今回、本校からは高校生部門で、最優秀賞と在ニューヨーク日本国総領事館賞を受賞しました。ここに紹介し、作品を掲載します。

最優秀賞

「心の堀を越えてみせる」

ワシントン日本語学校高等部1年 田島秀平

僕はタイのバンコクで生まれた。

誕生を祝福してくれるタイ人の知人によって、ブーンチューという仏教に由来する古典的なタイネームも授かった。タイは国民の95%が上座部仏教で、その教えに沿った生涯大切な意味をもつとされる生まれた日の「曜日の守護仏」や「シンボルカラー」があり、僕は幼いながらにそれらを認識していた。ちなみに僕は火曜日生まれで色はピンク、守護する方角は南東で神様は寝仏だ。

微笑みの国と呼ばれるタイの人々の優しさや困っている人を助けるという精神は、善行をする・徳を積むことで現生や来世に良いことが起こると信じている宗教観が大きく影響しているという。実際にその優しさの中で僕は幼少期を過ごし、すくすくと成長した。

ところが、そんなタイ人でも表情が変わって冷たいと

感じたことがある。カレン族の人々に対してのそっけない態度だ。カレン族はタイと隣国ミャンマーの国境に住む少数民族でキリスト教徒が多い。僕が生まれた16年前もそして現在も難民としてタイに大勢移り住んでいる。当時の僕は幼かったけれど、タイ人が彼らに対して「フレンドリーではない」「召使いのように命令している」ということをよく覚えている。2歳の頃、母親に連れられて国境近くにあるカレン族の村でしばらく過ごしたことがあった。写真にはカレン族の子ども達と僕が仲良く遊んでいる様子が写っていた。つまり僕にとっては、タイ人もカレン族もみんな友達だったのだ。

なぜだ。タイの人々に感じたあの違和感は何だったのだろう。そんなモヤモヤの輪郭が見え始めたのは、6歳でミャンマーのヤンゴンへ移住してからだった。

およそ半世紀に渡る軍事政権から民政移管した直後のミャンマーは、最大都市のヤンゴンでも国民のほとんどがロンジーという巻きスカートのような民族衣装を着ていて、頬にタナカという白い粉を塗って強い日差しから肌を守っていた。英語を話せるのはイギリス統治を経験しているお年寄りが多く、ミャンマー語(ビルマ語)

を理解できない僕の家族が生活していくためには、英語が話せるミャンマー人の助けが必要だった。それがカレン族だった。カレン族は第二次世界大戦でイギリスとの関わりが深かった上にキリスト教徒が多く、英会話ができる人も多い。より安全な生活に必要不可欠だということで、他にも数名のミャンマー人が僕らの暮らしに加わった。日常生活の助手はカレン族のポポア、守衛はカレン族のロマ、ドライバーはシャン族のイエ、モン族のエーエー、ビルマ族のトゥヤ… 驚くことに全員が「ミャンマー人」であり、信じる神も、好む食事も、話す言葉も、それぞれ微妙に違うのだけれどミャンマー人なのだ。

彼らとの暮らしはとても愉快だった。カレン族は日曜にミサへ行きクリスマスソングを歌い、蛙の唐揚げを食べる。ビルマ族は運転中でもパゴダと呼ばれる寺院には必ず手を合わせ、口の中が真っ赤になる噛みタバコを好む。シャン族は顔立ちは日本人と似ていて、納豆や漬物のような発酵食を食べる。モン族はのんびりしているが根は真面目。ミャンマーでの暮らしがまるで国境越えの縮図のように感じたし、まさに異文化交流で僕にとって彼らと過ごすことが学びだった。

しかし、それは上辺だけしか見ていなかった僕ら家族の痛恨のミステイクだということを思い知るのは、一人また一人と僕らの前から去るようになってからだった。英語で意思疎通をできることから、まずはカレン族の二人に伝え必要な願いごとを各々へ伝言してもらうことが主流だったのが、これが 大きな間違いだった。いや間違いではないのだけれど、少数民族同士の立ち位置を理解していなかったことで、ある人は傷つき、ある人は怒り、ある人はそれを利用し、全員の信頼関係が崩れてしまったのだった。 ミャンマーでもカレン族は「命令される側」だったのだ。カレン族に頼まれごとをされるのはプライドが許さない、らしい。これはカレン族のポポアから後から聞かされた実情だった。ミャンマーには 130 を越える少数民族がミャンマー人として存在しているが、大小あるけれど強い民族、弱い民族、争っている民族、独立を望む民族、いろいろが寄り集まっているのがミャンマーであり、軍事政権を握っているビルマ族が優位なのだと聞いた。ビルマ族は仏教徒が占めていて、長年にわたってキリスト教徒のカレン族を迫害していて、イスラム教徒のロヒンギャ族に至ってはミャンマー

人とは認めていない。ミャンマーは国境越えの縮図だと浮かっていたのは僕のただの幻想に過ぎず、無知だったことを深く後悔した。そして、ミャンマーでもタイでも居場所はあるけれど虐げられた扱いを受け続けているカレン族の人々の切なさを思い知ったのだった。そのミャンマーは民主化への道をたった 10 年で再び閉ざし、軍事政権に戻ってしまった。民主制の下での自由と平等という考えが多民族国家に少しずつ芽生え始めていたはずなのに、根こそぎもぎ取られた状況がただ悲しい。僕の感じていたモヤモヤは晴れることがないまま、ミャンマーを去ることになった。

そして、アメリカへ移住してきたのは僕が 14 歳になったばかりの頃だった。ちょうど「Black Lives Matter」運動の真っ最中で、黒人に対する暴力や人種差別の撤廃を大きなウェーブで積極的に主張している姿を目の当たりにした。そのパワーや情熱にとっても驚いた。彼らやその先祖がひどい扱いを受けて生きてきた経緯を知り、怒りや悲しみの感情がここまでのパワーにつながることを感じた。そして、少しずつではあるけれど、それは前進しているように見える。これは僕の心にあるモヤモヤを振り払う糸口のように思えたのだ。

いまアメリカの高校に通っている。クラスメイトは多様だ。というのも、国籍もいろいろではある が、アメリカ人なのに見た目は一緒ではない。つまり、アフリカ系もいればアジア系もいればラテン系もいて、全員「アメリカ人」なのだ。これは僕が以前ミャンマー感じた国境越えの縮図に似ている。しかもみんながお互いに認め合っていて、理解し合おうと努めている。なんということだ。信じる神、話す言語も、肌の色や目の色も、性の区別も、何もかもがそれぞれが違うことが普通だと気付かされる。

じつのところ僕のモヤモヤはまだ続いている。僕の国境越えは「心の塀を作らないこと」これを心がけながら、モヤモヤを晴らすべく過ごしていきたい。僕はアメリカでそれを見つけられそうな気がしている。

在ニューヨーク日本国総領事館賞

「寄せ鍋」

ワシントン日本語学校高等部 1 年 下村式桜

アメリカには「メルティングポット」という考えがある。これは、直訳で溶かす鍋という意味だ。この考えは1900年ごろに出来た考えでいろいろな文化が混ざりあって、新しい文化を作り出すという多くの人種が集まるアメリカらしい考えだ。だが、昨今では互いの文化を尊重するべきだという考えが広まり、使われる機会が少なくなった言葉だ。自分も互いの文化を尊重することは大事だと思うのと同時に、文化が混ざりあう事が一概に悪いとも言えないと思う。そのちょうどいい塩梅はどこなのか自分にはわからない時が多々あった。そんな自分が考えた末、とある結論にたどり着いた。「メルティングポット」ではなく、「寄せ鍋」という考えのほうが現代にはあっているのではないかと。

こんな突飛なことを考えついたのには理由がいくつかある。寄せ鍋はいろいろな具材を、鍋に入れるという日本独特の文化の一つだ。これを一度よく考えてみてほしい。寄せ鍋を冷静に見てみると、出汁を取ったお湯の中にいろいろな具材を入れているだけなのだ。これだけ聞くとあまり美味しそうな料理には聞こえない。だが、食べたことのある人は十中八九美味しかったと答えるだろう。これはなぜだろうか？その秘密は具材が互いの良さを引き出すからだ。例えば鍋でよく見る豆腐とお肉を入れたとしよう。お肉は生では食べないので、鍋で火を通してから食べられる。この時、お肉は出汁にうまみを残していく。その残された出汁を豆腐が吸って、淡白な豆腐に美味しい出汁の味がしみこむ。この出汁のしみ込んだ豆腐をお肉の合間に食べると、口直し代わりになりお肉がより美味しく感じるのだ。このように、互いに協力し合い、互いの良さを引き出しながら、自分の良さも引き出してもらっているのだ。自分はこれを国家、文化、人種間でも行ってほしいと思う。「メルティングポット」では互いの個性を消してしまい一つにしてしまう可能性がある。その個性を大事にして、互いに引き出せる状態の理想形がこの「寄せ鍋」なのではないかと自分は思った。

それに加えてもう一つ理由がある。これは寄せ鍋でよくある出来事だが、欲しい具材を取るときに取る予定のない具材も取ってしまい、戻すことはマナー違反なので渋々自分が取ろうと思っていたいなかった具材も食べるというというものだ。共感できる人が多いだろう。だが、

これは必ずしも悪いこととは限らない。これは裏を返せば普段食べない具材も食べられると言うことだからだ。間違っ取ってしまった具材が美味しいと気が付き、今後もその具材を食べ続ける場合もあれば、その具材を嫌い、その具材を避けるという場合もある。この新しいものとの出会いこそ、自分の思う二つ目の理由だ。「寄せ鍋」では自分の知らないものと出会う事が多い。そして、その新しい物を少し知ることができるのだ。これは多くの文化などでも同じことがいえると思う。いろいろな文化を知ることができる機会があるのは良いことだと思う。やはり人間なので、その文化があまり気に入らないことももちろんあるが、自分の気に入る文化とも出会う可能性があるのだ。そして、なにより多くの文化に対してきちんとした知識と敬意をもって接することができる。

このように、この「寄せ鍋」のような考えを皆が実践できれば様々な多様性が認められ、互いに尊重しあえるだろう。だが、やはりこの考えは理想論に近い物であることも否定はできない。このようなことを思う人は多いだろう。自分もそう思っていた一人だ。だが、その考えが変わったのは案外些細な事だ。自分が通っているアメリカの学校では毎年、自分の国の文化を紹介するイベントがある。それは昼休み中に、食堂で行われるので昼食を食べながら聞いていると、そこでとある生徒は自分の母国であるメキシコの音楽を流した。自分はその音楽が気に入り、今でも時折メキシコの音楽を聴いている。この、音楽を聴くようになったからと言って、メキシコに対する知識が劇的に増えたわけではない。だが、このような小さなことの積み重ねなら可能だと思った。

その後「メルティングポット」という考えを聞いた時、思ったことがある。「メルティングポット」という考えではそれぞれの文化が軽視される節があった。だが、「寄せ鍋」なら、それぞれが軽視されることなく国境や人種、文化の違いを超えることができるのではないだろうか？すこし子供っぽい、「寄せ鍋」という考えなら「メルティングポット」では最終的に一つの文化になってしまう多くの文化を、互いの良さを引き出しあいながら共存していくことが可能なのだ。自分はこの考えが、人種や国家などの境界線を考え直すきっかけになってくれると思っている。